

白川郷の合掌造り



創刊号

平成10年3月30日

発行 (財)世界遺産白川郷
合掌造り保存財団
岐阜県大野郡白川村荻町
2495番地の3

平成七年に、重要伝統的建造物群保存地区荻町集落が、ユネスコの世界遺産に登録されたことを契機に、白川村では、集落の保存と住民の生活との調和を図るため、「財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団」を設立しました。

従来村が全国から募るなどして運用してきた「合掌基金」を

遺産と住民が共存共栄

もとにスタートしましたが、設立後の岐阜県からの出捐（しゅつえん）金（基本財産への寄附金）と合わせ、基本財産約三億円、運用財産約一億五千万円、そして、保存事業に対する村の支出に対しての岐阜県の補助金を加えて平成九年度から財団の事業に着手しました。

初年度にあたり、財団では、荻町集落の保存にあたっての基

本的な指針づくりとして、まず、「荻町総合振興計画」を策定することとしました。計画の内容については、景観としての合掌集落を理想に近い形で守り続けるには、そこに住む住民の基本的な生活環境が保障されなければならず、時代の変化に対応してどのように住民が快適に住み、どのようにして歴史的な景観を

極端な変化から守るのかという、この集落に突きつけられた矛盾にどう対処していくべきかという課題にも取り組んでいます。

さて、財団は、これまで集落に住む住民のさまざまな負担や日常生活上の不便さなどに対して、文化財保護法のもとでは補償されてこなかった数多くのケースに対して、積極的に踏み込んでいくことを目的の一部として

います。それにより、従来の文化財保護の施策を助け、住民の生活により密着した状況把握を行ない、保存に対する一層のコンセンサスの醸成をめざしていきます。

これまで住民が全額負担してきた保存にかかる経費、例えば、日常生活の中で自分が住んだり利用したりする建物の新增改築や、田畑の地目変更、樹木の伐採などの要望のうち、許可が得られないものや変更にあたってのさまざまな条件がつけられたケースについて、条件に従うことによる余分な経費に対し、その一部について助成を始めました。

また、屋根葺替のような計画的に行なわれる修理は、文化財保護の補助対象事業として助成を受けていますが、毎年一度はやらなければならぬ棟（屋根の頂上部分）が葺かれていく茅の置き換えや、部分的に痛んでいく小修理には、補助金が支給

されていません。これらは、意図と、屋根の寿命を早めるため、茅屋根の維持には欠かせない大切な作業なのです。これに対しても財団が助成を行なっています。

今後、永い将来にわたって、住民が、この集落に住み続ける、あるいは、住み続けたいという

願望が持てる生活本拠地としての条件整備を行なうことは、世界の文化遺産を維持するために必要欠くべからざることであり、考えます。財団の使命は、そのことを全うすることであると、ともに、世界に広く遺産保護の趣旨と課題を示しつつけることでありましょう。



銀色の季節とはしばらくお別れ

出帆 遺産保存丸



理事長 高桑 英一

遺産価値の発見

白川村に合掌造り建物が生まれ、今日まで残されてきたことは、村にとって非常に意義の大きいことですが、その背景には、さまざまな取り組みや確執が含まれています。今に生きる、私たちにとって、祖先が生み、伝えてくれた文化遺産に対し、それと、どうつきあい、いかにして残していくかが責任として問われています。

財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団初代理事長に就任した、白川村長高桑英一が、回想の形で所信をお伝えします。

私どもの村の切妻式合掌造りに文化的な価値があると認められるようになったのは、昭和十五年頃でした。昭和二十五年から三十八年まで、村は電源開発の波にのみこまれ、最盛期の御母衣ダムが建設中の三十四年頃には、人口も九千八百人とピークを迎えました。村の内部から見ていただけでは、いかにもあたりまえで何の変哲も感じなかった合掌造りが、ダム建設を通じて、激しい人の流入出によって、その特異さが世間に知らされていったのです。

そして、ダムの湖底に沈もうとする集落から、合掌造りが次々と買い取られ、都会に移築して、料亭やドライブイン、民芸館等に利用されました。

たしか昭和三十年だったと記憶していますが、東京から来られたお客様が、次のように言われました。

「なぜ、白川村は貴重な財産が都会に出て行くのを黙って見ているのだ。売る合掌があれば、村が買い取って保存すべきだ。移築する金がなければ火をつけて燃やしてしまえ。都会には出すな。」と。

これまで、白川村から流出した合掌造りは、およそ三十七軒であり、そのどれもが、村を代表するような大きな建物ばかりでした。

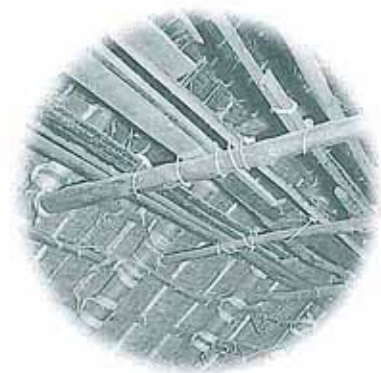
合掌群の美しさ

私どもは、元々、合掌造りは、単体でしか見ておらず、群れがなす集落美の価値に気づくのは、ずっと後のことです。

周囲の自然と一体となって形成される合掌造り集落の美しさにこだわれば、悔やみきれないいくつかの小さな集落を失ってしまいました。あまりにも便利が悪すぎて集団離村した加須良集落や、急峻な谷あいにはひっそ



ありし日の加須良集落



いざ 白川郷世界

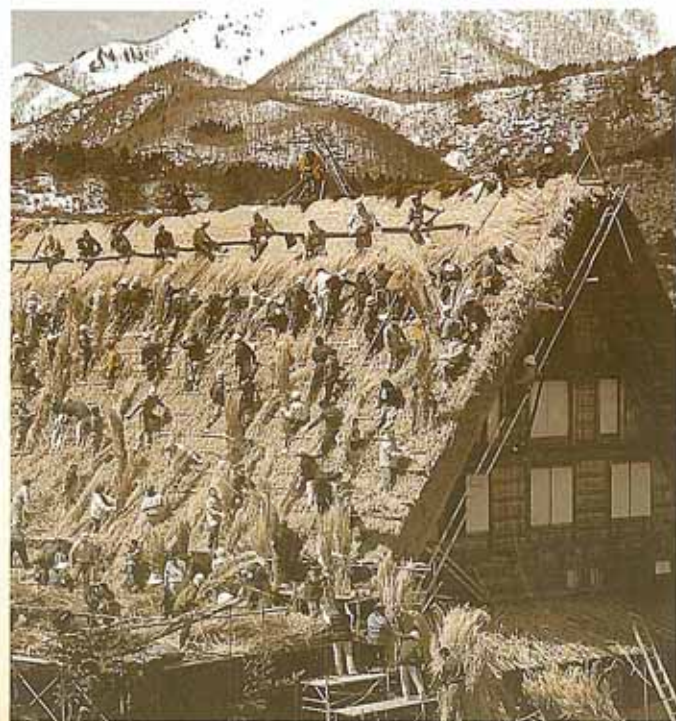
りと五軒が建ち並んだ芦倉集落などの集落景観は、合掌造りが放つ素朴な農山村のイメージがひとときわ立っていった典型的な合掌造り集落といえるものでした。

さて、外部の人たちによって、合掌造りがもてはやされる価値のある物だということが分かってくると、村の内部にもようやく、残さなければいけないという意識が生まれ始めました。昭和四十二年に荻町に住む佐藤茂盛さんは、合掌造りを残す手段として、合掌民宿営業の第一号にいち早く取りかかりました。それが、次々と民宿経営を始め、そのきっかけとなったのでした。

昭和四十六年頃、旧国鉄が打ち出した「デイスカパージャパン」に白川郷が取り上げられ、以後マスコミの力によって、どんどんと、村が外部に紹介されていきました。

保存運動のめばえ

それと歩調を合わせるように、荻町に住む住民の中から集落の保存を訴えるようになり、長野県南木曾町の妻籠宿をモデルにした「荻町集落の自然環境を守る会」が、住民全戸が加盟して発足しました。この会の活躍は、昭和五十一年に行なわれた第一



結いによって支えられてきた合掌の屋根葺替作業

回の重要伝統的建造物群保存地区の選定に結びつきました。

白川村の内部といえども、現代生活にとって合掌は、維持費がかかりすぎることで、家の中がだだっ広くて暗いこと、隙間風がはいりこみ、その上天井が高くて寒いことなど、さまざまな要因が、合掌造りを残し、そこに住み続けることを困難にしています。幸い、国による文化財の選定以来、集落内の伝統的な建物には修理費の助成などが受けられるようになりましたが、住民が受ける規制や、観光客がもたらす利益、外観の規制は同じであるのに修理の助成がうけ

られるものとそうでないものの差など、受け取る側の住民の間にさまざまなギャップがあつて、これが、保存に関わるあらゆる問題の解決を困難にしています。

景観の維持と

住民生活の保障

現代の生活は、今も日々刻々と変化しています。合掌造りが生まれた社会の背景とは、すでにがらりと変わってしまったいるにもかかわらずです。そんな事情の中でお、合掌造りを住みながら残そうということが難しいことは明らかです。社会の

背景の変化は、合掌造りを生み、継承してきた住民達のコミュニティケーションをも変えてしまいました。「結い」のような、合掌の建築、屋根の葺替に必要な大規模な原動力が、維持されにくくなってしまったのです。

この集落に人が住み続けることは、世界遺産たる価値を保つために最低限必要であると思えます。それなのに、人が住んでいないからこそ、毎日変化を伴います。その変化は、人がそこで生きていくために避けられないことが往々にして多いことも事実です。しかし、できる限り、景観の変化を最小限に食い止めなければなりません。住民が、守られた景観の中で、できるだけ快適に住むことのできる条件を整えなければなりません。そのために、行政は、この相反する矛盾に対処していかなければなりません。

これまで、文化財保護の観点から、荻町集落の保存に当たってきたわけですが、住民の生活ニーズにより密着した保存行政を行なうために、保存財団を設立しました。行政の、文化財当局と連携し、集落ひいては、村全体の地域振興の一翼を担うことができるようめざしているところです。

平成9年度に財団が行なった事業

1. 修理事業	
・ 差茅助成 19棟	2,163,000円
・ 棟茅葺替助成 77棟	2,803,000円
・ 伝建物修理費 6棟	1,325,000円
・ 非伝建物修理費 6棟	4,839,000円
2. 修景事業	
・ 修景協力費助成金	8,251,000円
3. 守る会活動補助	
	1,000,000円
4. 調査普及事業	
・ 荻町総合振興計画策定	10,210,000円
・ クイックタイムVRシミュレーション製作	7,500,000円
・ 吸殻投げ捨て防止啓蒙事業	3,360,000円

ありがとうございます

平成9年度 募金ご協力者一覧

(敬称略)

神奈川県	鈴木義也/佐藤清正 (代表)
岐阜県	河合志ん/津田早苗/竹腰淳二/安藤薬業 /平成薬品/松井薬品/澤田栄治/(株)はやし /岐阜大白川郷研究会/小邑工芸/三輪高史 /高山ユネスコ/丸新消防/下出広告/都築敏樹 /成原繁栄/清水義之/大沢信孝/内木大二郎
愛知県	松野良一/川内三郎/マルナカ建設工業/ 岩田はるの/はるの会/内田州昭/公共広告機構
埼玉県	細谷恵子/内田良樹
東京都	細谷英昭/共同土曜会/中村光雄
石川県	山本美鳥/手取コンサルタント
兵庫県	日立機電工業/岡本和夫
新潟県	丸山光江
香川県	柴田聡
福島県	中山輝雄

世界遺産白川郷合掌集落保存基金にご理解とご協力を

財団では、白川村が行なってきた、白川郷合掌集落保存基金の趣旨を受け継ぎ、荻町集落に暮らす住民の生活により密着した保護施策を進めるため、集落景観に重大な影響を与えるような生活上で受ける制約に対して、その負担の一部を助成してまいります。

それらの経費をまかなうには、財団のわずかな基本財産の運用益だけでは、はるかに及ばないのが現状です。

現在は、それを補う窮余の策として、岐阜県の助成を得て、白川村が、緊縮財政の中から捻出しています。今後、財団に対して要請される事業が、社会情勢の変化に伴って、ますます多様化していくものと予想されます。財団がこのような課題にできるだけすみやかに、的確に対処していくためには、基本財産をより充実し、運用できる果実をもっともっと増やさなくてはなりません。どうか、財団の趣旨にご賛同くださり、皆様の暖かいご支援、ご協力をお願いします。

基金に対するご寄附お送り先

☆振替による場合

- ・ 郵便振替口座 00810-6-51954
- ・ 飛騨農業協同組合白川支店 (普) 9203800
- ・ 十六銀行白鳥支店 (普) 261-213783
- ・ 八幡信用金庫荘白川支店 (普) 03-034293

☆現金書留による場合

〒501-5627

岐阜県大野郡白川村荻町2495-3

世界遺産白川郷合掌造り集落保存基金事務局

島根県	牧野正雄
北海道	大久保昌子
秋田県	石川計二
和歌山県	石田真紀

編集後記

折り目正しい四季の移り変わり。などという、気候が人のいうこと聞くわけないじゃないか、といわれそうですが、最近の天候は、全くもって自由奔放です▼わが村は、特別豪雪地帯で、住民は、毎年三メートル近くも積もる雪には辟易しているのですが、規則的な雪の到来は、その変化を予測して備えている村の経済を支えているのも事実。大雪が東京圏を襲ったというのに、白川には、例年の三分の一程度で終わってしまった。雪の始末のために、使わなくても良いはずの労力とお金が、突然の所得減税のようにどこに行っただのかわからない▼それでも住民は、過ごしやすくありがたい、と思っているところへ、雪景色をあてにしてきた観光客に、雪が少なくてつまらない、といわれると、とても複雑▼そうこうしながら、財団も、早や一歳を迎えました。そして、やっと、会報の創刊にこぎつけることができました。たくさんの人たちの暖かいお志で事業を進めることができるので、ささやかなお便りだけでも、と思います▼さあ、桜の香りに急ぎ立てられるように、白川人の足音も、せせこましくなってきたぞ。